



学校は失敗するところ！ 教室は間違えるところ！ 授業は子供が主人公！ 誰一人取り残さない！
子供の成長を教育活動のど真ん中におく！ One for all. All for one. ONE TEAM. チーム拝二小

I 問題の所在

「問題行動・不登校調査」結果(文部科学省 2020 年度)からいじめの認知件数(小中高特)は、517,163 件であり、前年度に比べ、95,333 件減少している。児童・生徒 1,000 当たりの認知件数は 39.7 件(前年度 46.5 件)である。解消しているものの割合は、以前までは 8 割後半から 9 割前半を推移していたが、2018 年度から 8 割前半となり、2020 年度は、77.5%(小学校)となった。

いじめの態様状況(小学校)は、「冷やかしかからかい、悪口や脅かし文句、いやなことを言われる」が最も多く、57.9%である。また、いじめの認知件数が減少するなかで、「パソコンや携帯電話等で、ひぼう・中傷や嫌なことをされる。」の件数は、全体で 18,870 件と、引き続き増加傾向にある。パソコンや携帯電話等の扱い方も含めて、家庭と連携・協働して指導をしていく必要がある。

II 「いじめとの向き合い方」〈解決策〉

◇ いじめは「いつでも、どこでも、誰にでも起こり得る」という前提に立つ。
教師の大事な使命のひとつ：人権感覚・人権尊重の精神を培っていくこと。

1 チームで対応し、教師一人一人がアンテナを高くしておく。

○学校のいじめの多くは学級の中で起こっており、担任は自分の指導力が足りないと悩み、一人で抱え込んでしまうことがある。しかし、学年やいじめ対策委員会、管理職に報告・連絡・相談し、チームで対応することが大切である。また教師一人一人は、いじめに対するアンテナを高くしておくことが求められる。そのためには「いじめの態様」をよく把握しておく必要がある。

・冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる。 ・仲間はずれ、集団による無視をされる。 ・軽くぶつかったり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする。 ・金品をたかられる。 ・金品や物を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする。
・嫌なことや恥かしいこと、危険なことをされたり、させられたりする。 ・パソコンや携帯電話で誹謗中傷や嫌なことをされる。

2 SOS を出せる学級づくりをする。

○学級内の差別構造を壊す。「いじめの温床になる授業とは？」

・いつも同じ子が発言している。
・特定の子の意見には反対が出ない。
・多様な意見が出ない。

続けていくと

●自由に自分の意見が表明できない状態！
●所属意識がもてない状態！
⇒差別構造がますます強化されてしまう！

☆児童一人一人に、「いま現在の『できる・できない』の差は微々たるものであり、今後の努力で決まる。」という意識をもたせる。

☆「誰もが進んで発言できる」授業を展開する。

☆学級力スタンダード(③誤ったことをしている友達がいたら、見て見ぬふりをせず、注意することができる学級です。④友達のことを傷つけることを言ったり、からかったりしない学級です。⑤分け隔てなく、誰とも接し、協力して活動することができている学級です。…〈略〉)を活用し、「振り返り⇒よさ・課題⇒解決策」について、真剣に話し合う場を設定する。

学年集会や学年・学級など集団の場面で必要な指導や援助を行う：力
児童一人一人が抱える課題に個別に対応した指導：力

3 児童との信頼関係を築く。

○いじめられている子は、いじめられていることをなかなか言わない。「この先生に相談したら何とかしてくれる」、「この先生に話すと気持ちが楽になる」という信頼を、教師が日頃から「いかに得ているか」が問われる。

☆学級経営におけるガイダンス機能と、カウンセリング機能を(バランスよく)充実させる。

☆一人一人の児童にとって、学級が自分の存在感を、実感できる・発揮できる場になっていることが大切である。